序

『政治学研究』は、慶應義塾大学法学部政治学科の学生による論文集である。年２回、卒業論文を収録した奇数号と、三田祭に向けた共同研究の成果と個人論文を収録した偶数号が発行されている。創刊は1968年であるから、実に54年もの歴史を刻んできたことになる。

2022年春、塾は、コロナ対策を継続しつつ、授業を全面的に対面へと切り替える決断をした。ようやくキャンパスに学生が戻り、学生も教員も、顔を合わせ、語り合うことの楽しさ、人間同士のつながりの輪を広げていくことの大切さを日々実感した。今の３年生は、入学以来ずっとコロナ禍に翻弄されてきたのであるから、その喜びもひとしおだったのではないだろうか。三田祭も２年ぶりにオンラインではなく三田キャンパスで開催することができた。本号に論文を寄せたゼミの皆さんもまた、新鮮な気持ちで三田祭に参加し、互いの絆を深めたことだろう。

今更ながらだが、多様なコミュニケーション手段を手にしたはずの私たちの日常に、議論の場は思いのほか少ないのかもしれない。あるいは匿名での140文字のテキストの交換や、「いいね」での意思表明など、その形態も多様化ないしは重層化しつつあるのかもしれない。

速報性が重視される時代にあって、論文の執筆とは、暗い闇の中を一筋の光を求めてひたすら彷徨うようなものである。問いや仮説をたて、膨大な先行研究を整理し、論点を絞り、分析対象を定め、実証し、言葉を選び一語一語紡いでいく。前に進んでいたと思ったら、知らずして方向を誤っていたりする。論理的思考を共有し、ぶつけ合い、議論を積み重ねながら、ともに一連の長い旅程を踏破し、論文を仕上げた皆さんはおそらく、その非日常的時間の意義深さを実感していることだろう。皆さんの努力に敬意を表するとともに、心からお祝いを申し上げたい。

末筆ながら、政治学科ゼミナール委員会、法学研究編集委員会、慶應義塾大学出版会を始め、本号の刊行にご尽力された方々に、厚く御礼を申し上げたい。

2022年11月30日

法学部教授・政治学科学習指導
小嶋華津子